

お花見コンパ

顛末の記

by せっちゃん

そもそも4月15日(土)は、「8日(土)では入学式他でOBは多忙ではなからうか?」と決定されました。その時点で「花なしコンパ」とも噂されました。さらには、「その頃なら、現役の新人勧誘の援助になるのでは?」の声もありました。後者は人数比に懸念があり、沈静化していきました。

ところが、ところが、長い冬の御蔭で、15日がほぼ満開の巡り合わせになってきました。その点では、8日に浅ノ川園遊会を催した某商工会より、ワングルOBの名に恥じぬ読みの深さというべきでした。

しかし、しかし、まともに100%の降水確率となり、花より団子の実益をあげた某商工会より、馬鹿さ加減を暴露することになったのでした……。

さて、時代は「花金」。土曜早朝に、沈床園へ駆け付けたせっちゃんが見た物は、前夜の宴の後と、闊歩するカラス、所在なげな陣取り学生5組程でした。

宴の後、といっても、わずかの散乱が残るのみで、カラスの害、ならびに観光シーズンの景観保持のため、深夜のうちに処分の手が打たれたことがわかりました。何より、トタン製大ゴミボックスが仮設され、「燃えるゴミ」「燃えないゴミ」の区分までされていたのが感慨物でした。沈床園の酒宴がどこまで許可されているものか、ちょっと気にしていただけに、なかなかの気配りと思えたのでした(以上までに、キーワードが入っています)。

ビニルシート2枚を広げ、35周年記念時に制作した「金沢大学ワンダーフォーゲル部白山記念登山受付」の垂れ幕を貼り付け、陣取り完了。まだ家族は夢の中のうちの事でした。

天気予報って、あたってほしくない時にあたるものなのです。本日は、2時から観光会館でエヴェレストビューホテル社長の講演があり、その後沈床園へ向かえば丁度の按配となっていました。

ポツポツ落ち始めた空の下、観光会館への自転車を止め、ひょいと見上げると、あー、やってる。田村教祖様と、早々から番をしていたという奥名会長。スキー合宿からの差し入れが、かなり空いてしまったようです。爛漫の桜の下の御蔭で、どうにか雨の直撃を免れているものの、全面濡れは時間の問題。それに、朝の陣取り組が全員消え、気合い入ってるワと思えたドームテントも失せていました。「鈴木(同期)には、断っといたよ。」仕方ないわよねえ。大阪からこんな雨の日に来てもらっても。

シートの内側が濡れないように処置して、観光会館へ向かいました。私はこの講演会があることを、ヒマラヤ観光開発に照会の手紙を出したことがあるという友人から聞きました。彼女が「だから案内がきたんじゃないかしら」と言っており、講演会後の質疑応答も、それらしき傾向がありました。

ともあれ、ビデオに映し出されたのは、1ヶ月程前に見てきた懐かしい景色でした。但し、「豪華・快適ホテル」が前面に出ていて、これじゃあ、景色をスイスアルプスに入れ替えても一緒。嵌め込まれた絵葉書にすぎない。石垣、煙の臭い、牛の糞、シェルパ達。それらの向こうに光っていた山々だったよ! 似て非なる物。懐かしさと、ちゃうよ! がごっちゃになって、



田村教祖と奥名会長。
撮影：舟田事務局長

三人揃えば、OB会の揃い踏みならぬ、揃い飲み。
この神経があれば、どんな辺境にも旅ができます。

なんとも複雑な時間でした。

この席で、教組様は、最前列に座られ、質疑応答の際には、「ヒマラヤに惚れました。しかし、客では行きません。従業員に雇って下さい。」と、いつものペースで座を盛り上げたのでした。(その件の後日回答は「月給2万円、3ヵ月のみ」…でした)

その講演の間に本降りになり、同席していた上馬夫婦も帰途につきました。

本日のコンパは返事不要、雨天中止となっていました。でも、誰かが顔を出したなら…やっぱり待っていてあげるのが筋ではないかと、沈床園へ戻りました。爛漫の桜の豪華な広場はひっそり。学生の1グループだけが、ゴミ箱裏に宴を張っていました。

ビニルシートの1枚を屋根とすべく試みるも、紐も足りず、そんな抵抗をしてみたものの、結局「この大ゴミ箱に屋根としてかぶせるのが一番」の結論に達してしまいました。では「燃えるゴミ」側にするか? 「燃えないゴミ」側にするか? なかなか意味深な選択とも言えました。もちろん私達…田村教組、奥名会長、舟田事務局長は、どうせなら「燃えるゴミ」であ

りたい人種でありました。しかし客観的に見て、「燃えるゴミ」側はやや異臭があり、「燃えないゴミ」側のピンをどけた方がましのようなのでした。そうやっての設営中も「ワングルでなかったら、絶対こんなことやらん!」のつぶやきが聞こえましたが、まあまあ。

なんとかご接待会場が仕上がり、コンロを広げジュージュー。「あ、いい匂い!」の声に、トタン越しに、焼きウィンナと花見団子を交換。数寄者同士、エールを送り合ったのでした。

「え! こんなところでやってんの?」の松林氏が加わり、講演会場で出会った「あれだわ氏」(クンプ協会の代表G氏)も飛び入り参加。まずまずの賑やかさ。

ライトアップされた桜は重たげに花房を垂れ、その隙間からは、これまた思わぬ光線に眩んでいるような雨粒達がキラキラ落ちてきます。百間堀もただただ静かに、オレンジがかった桜達が、散華の前のひとときをむつまじくあっていた。

7時。これにてお役御免。兼六園の茶屋の甘酒で温まり、解散したのでありました。

以上、ミレニアム花見の記でした。

2000年春小屋酒場

(食料計画)	12夜	13朝	13昼	13夜	14朝	14昼	バイト現役
0期 田村 昭夫				○	○	○	佐藤 豪一郎
15期 奥名 正啓	○	○	○				(5回生 新OB)
15期 舟田 節子	○	○	○	○	○	○	矢内 佑一(4回生)
18期 椿川 利弘	○	○	○				角谷 誠(4回生)
13期 辰野 隆義				○	○	○	矢田部 桂(3回生)
13期 吉田 穂積				○	○	○	清水 健作(3回生)
13期 吉本 良治				○	○	○	
15期 上馬 康生				○	○	○	



椿川 舟田 奥名 高三郎頂上

【これは、息子から借りてきたAPS。リモコンシャッターでホラ!】

高三郎と犀川ダム

18期 椿川 利弘

ゴールデンウィークの次の土曜日に、奥名会長、舟田事務局長と一緒に、高三郎に登ってきました。これまでの高三郎登山で最高！でなかったかと思います。ユキツバキ、タムシバ、ホンシャクナゲ、カタクリの花が見頃で、登山道にこんなにいっぱいあったかと思うくらい見事でした。また、新道と旧道の分岐から頂上付近を見ると、遠く雪の上に見えたカモシカが何ともかっこよかった。

今回の私の役割は、後発隊が土曜日と日曜日でベルクハイムの床張りをする事になっていて、前日の金曜日に犀川ダムからボートを使って、その資材を運ぶことでした。

資材運びを手伝ったのは、現在、県の河川課に勤務していて、ダムの職員を知っているし、犀川ダムのことに間接的に携わっているからです。

ここで少し犀川ダムについて説明しますと、なぜか犀川ダムは、金沢市が工事して県が管理しているダムで、昭和40年度に完成した県内2番目のダムです。そして、洪水調節のほか、水道用水の確保、発電等の多くの目的がある多目的ダムとして建設され、ダム上流の倉谷等の集落の人達が移転しました。

犀川ダムとの関わりは、昭和48年5月に新トレで、駒帰から歩いて、やっと犀川ダムに着いた時からです。当然高三郎もその時が初めてで、山に登っている時は周りが見えていませんでしたが、犀川ダムから見た高三郎はよく覚えてます。



【高三郎頂上部。新緑、シャクナゲ、残雪の頃がベストシーズン。現役の頃はフラッペ。OBなら、残雪冷え冷えビールが至福。】

2年生の時にベルクハイムを建て替えることになり、犀川ダム管理事務所からボートを借りて、セメントや木材を選びました。今では船舶免許がないと運転させてもらえませんが、この当時は、ボートの運転も自分達がして、好き勝手に使って何回も往復したり、エンジンが止まってオールで漕いだこともあったりしたけれども、管理事務所の人も大らかなものでした。

また、大学院の時に、1学年下の高桑君がダム上流で地質調査をしていた際に行方不明になったと聞いて、犀川ダムの管理事務所に泊めてもらい、翌朝捜索に行った時にも、ボートで送り迎えしてもらい、お世話になりました。そして、残念ながら見つけることが出来なく、高桑君の両親に最初の捜査報告を自分がしなければならなくて、辛かったことを記憶しています。

ところで、このようにボートを使える場合以外、高三郎に登る際には、必ず犀川ダム貯水池脇の道路を通らなければならないのですが、この道路が年々崩壊してきていて、吊橋の上流で新たな崩壊箇所もありました。この道路の通行人としては早く補修してほしいものです。

しかし、ダム管理する立場としてみれば、実際のところボートを利用するため、この道路を利用してないこともあり、限られた予算の中で、道路補修は後回しになっているのが現状です。そのうえ、この道路の管理責任などが明確になっていないようです。

私的には高三郎と犀川ダムはセットになっており、これからもベルクハイムの補修と共に、貯水池脇の道路も含めた登山道の整備に関わっていきたいと思っていますし、これから年を重ねても、高三郎に挑戦していきたいと思っています。

* 矢内 佑一 42期

先日は多少疲れましたが、とても楽しかったです。昨年的小屋作業時にベルクハイムの床に数ヶ所穴が空いてしまい、どうなることかと思っていましたが、今度OBの方が修復作業を行うということで、完了した際には是非ベルクハイムに足を運びたいと思います。

先日はお疲れ様でした。

* 詠み人知らず

引退し やっと分かりし 山の味

ベルクハイムは 姥捨て山



* 清水 健作 43期

舟の旅は楽しかった。春と秋で水量が違うのにびっくりした。新緑の高三郎は美しい。

* 矢田部 桂 43期

今までに何度か歩荷のお手伝いをさせて頂いたことがありましたが、ボートを用いてのお手伝いというのは初めてでした。

歩く速度にはない、流れる景色と風、そして心地よい波と、とても新鮮でおもしろい一日でした。

でも、次に高三郎へ行く時、あのアプローチの長さを思うと少しひるんでしまうかもな、と想ったりもしています。

ありがとうございました。また何かありましたら、声かけて下さい。

【水門を抜け、犀川ダムを振り返る。
「舟」で「山」に行く？】



春の山小屋酒場

15期 舟田 節子

年2回の会報発行というのは、この種の会では珍しい方だと思う。

そうした理由の第一は、まず、転居の転送サービスが一年間であるから、年2回発送なら、移転先不明になる事態を防げるであろう。(転送されてくれば、OB会へ転居を未連絡と気付いてもらえる)。その第二は、せめて2回は出さないと、行事のお知らせを兼ねる事ができないというものだった。

行事のお知らせの度に、連絡費を使い、発送作業をするのはOBの身には不可能である。さりとて、何も行事がなければ、何の為のOB会なのか？

ここでOB論を展開する気はないけれど、部は学歴以上に、当人の指向がからんでの関わりである。何周年記念の単発の寄付集めだけなら、「懐かしい」のみでよいかもしれない。しかし、存続し続けるなら、なんらかの行事の提言は必要である。それが、会報紙面に公示され、みなにノミネートチャンスがあるというのも、大事な事なのだ。

という訳で、実際役員だってその頃どこに赴任しているものか？なのだけれど、かかさず行事予告を盛り込んできた。そんな非現実的な善処をしても、ほとんどのOBにとって、現実に参加予定を組む程にはならない。よしんば予定しても、限りなく優先事項が入ってしまう。そのあたりはどうしようもないのである。

毎度の長い前書だけれど、「ミレニアム 春の山小屋酒場」も、結局はいつものメンバーで開催される事になったのだ。(メール網では、何度か広報が出たし、15期同期会シリーズのうちでもあったが…)

5月12日(金)

今回私は早々と、代替指導者の手配もして、ルンルンで準備にあたっていた。苦節(?)30年、初めてボートで倉谷入りできる。例の「くたばれ!切れ込み」を横目に悠々と…。それは、食材の重量も梱包も 気にしなくてもよいという事でもあって、パッキングも鼻歌混じりになるくらい。

ただ、参加メンバー減は、出立直前まで出る始末。余れば担いで戻らなければならないのだから、その度に抜き取り。かく言う私も、直前に親戚の葬儀が入り、3日「つぶれた」(不謹慎ですが、十分お年の方でしたので)上に、当日の朝、まだ泊り客がいた。責任から、お義理のつきあいまで、「山のような足カセ」が、OBの現実なのだ。

だからこそ、ダムに着き、茫洋の湖面を見た時には、「やっと、世間離れができる」の、背伸びが出た。さあ、リフレッシュタイムの始まりだ!

犀川ダムに1時集合。その前に、辰野さんと椿川さんは、資材の買い出しに出ていた。見積もりでは、老体OBにはとても搬入は無理となり、5日前に加藤ジュニアに現役バイトの手配も頼んであった。その現役5人もここへ集合となっている。

まず辰野カーから、杉板をおろし、運搬し易いよう、5本ずつくる。今BHに張ってある合板は見栄えはよいが、湿気にはもろに弱く、一枚板の方が持ちがよいとの事。さらに、2×4建材の中に面取りをした具合のいいものが見つかったという。このあたり私は知識ゼロ。いつも感心するのみである。椿川さんは、ダムの管理人に挨拶に入っている。

そして現役連中が到着。これがちゃんと顔がわかる。40周年で見た「子」や、去年の懇親会で飲んだ「子」。こっちも現役に頼むのはそれなりに億劫である。「必然性」もしくは「大義名分」を用意しないと、そう安易に受話器を取れるものではない。それが、加藤Jrに「任せて下さい」の返事をもらい、こうして、犀川ダムの地に現役が来て、一緒に仕事の段取りとなると、ああやっぱり、為せば成る。嬉しい。

BHがあって、山小屋酒場があって、良かった!仕事があって、「必然性」や「大義名分」が湧いてきて、頼んだり頼まれたりで、人はつながることができる。実際、BHや高三郎がなかったら、OB会の運営や現役との交流は、かえって難しくなっていたのではないだろうか。余計なお世話をしたくもなければ、気楽に頼めもしないというふうに、近世、人のご縁は疎遠に流れるものと、相場は決まっている。我知らず、常識のように身構えた殻を、こんなふうに破れた時は、「やったぜ!」のガッツポーズが出る気分だ。(何せ、息子には「学生気分の抜けんやつ」と呆れられている。)

事務所から職員と出てきた椿川さんも、5人の現役を数えて嬉しそう。早速指示を出して、気合いが入った様子。辰野さんは、この後は、帰社して、本来のお仕事に励まれるそう。ご苦勞様。

今年は雪が多い。そのせいか、ダム湖の水位もこれまでになく高かった。ボートまでの階段が恐怖だったのに、目前にボートが浮いている感じ。という訳で、積込みもいってスムーズに進行する。

椿川さん、佐藤君(5回生)、矢内君(4回



【吊橋をくぐり抜ける。
水量の違い…それは、
山が生きている証】
オジサン
清水 角谷

生)、矢田部君(3回生)が第一陣。流 避けの水門開けにやや停滞した後は、あれよの間に消えてしまった。

さっきまで雨がおちていたくらいだから高三郎は見えていない。このところ、登山口に着いたらあふれる車にギョッの山ばかり。この静けさ、豊かな緑…不便なままで残ってほしい。

ちなみに、金沢だって昔の町名が復活し始めている。効率優先の高度成長期から、減速期へ…豊かさの尺度が変わろうとしているのだ。大量に登れ大量に泊まれるメジャーな山より、ヤブに紛れそうな道とろうそく灯る小屋のマイナーな山。車と高速道路による何日間百名山路破より、近くて自然豊かな山への四季詣で山遊び。後者が復権する時代が来ている。

おまけに、今犀奥は、何重もの規制がかけられた、特別自然保護区域である。そんな所に、昭和38年来の既得権により、小屋を構えていられる。そこは、大学が3年に1度、9000円の地代を営林署に払ってくれていて、他に維持・管理費を要求される訳でもない。見方を変えれば、私たちはとんでもない贅沢な場所に、気楽なセカンドハウスを持っているようなものだ。

さらには、介護保険制度ができて人も人は幸せになる訳ではない。動く体、気力、関わる人がいて、待ちどおしい朝がある……きっと、そんなあたりなのだ。わかっていながら、「日常」はそれを忘れさせてしまうし、そんなピュアな感性じゃやっておられんのが現実。だから山小屋という「非日常空間」が貴重なのだ。

以上の「山小屋復活論」、どこに受理してもらえばいいんでしょう？

第二陣は、奥名会長、私、清水君(3回生)角谷君(4回生)。清水君はNHKの取材なんかでナカオの林代表と面識があるというし、角

谷君は去年の懇親会で、梅さんに憧れの人！という感じで密着取材をやった「子」だ。新人は13名入ったとか、話につながる。

20分でもうボートは戻ってきた。残りのセメントや、脚立を積み込み出発。本当に一度もボートに乗ったことがない。だから、真後ろに遠ざかっていくダムに感激。豊かな水際につかる木々の目線も新鮮なら、その上のムラサキヤシオツツジも秘境の麗花の風情(誰にも見れるものじゃないんだから)。切れ込みは、こっちが気をつけていたからわかった程度だったし、例の出島は、オジサンがわざわざ、岩壁と出島の間の、こんな時期の今年しか通過できないであろう隘路を通過してくれた。あの倉谷の赤い吊橋も見上げて通過。たった10分で倉谷に、ゴッスンと到着。快適すぎてはまっちゃいそう。

川岸にはまだかなりの材木が積み残されている。さて、と時計を見て、当然のように「4時に迎えをお願いします」と言って、舟を見送る。あすテン設トレも控えた彼らには、そこまでが限度だろう。引き返してきた椿川さんにそう伝えたら、彼の方は運搬が済んだら歩いて帰るものと思い、三便目までは頼んでなかったらしい。ハア！？時に、女の図々しさの方が、事をスムーズにしまう場合があります…アハハ。どのみち、お礼を言いに行くのは椿川さんですし…。ともあれ4時までには運搬を終えなければ。

舟着き場からは、物を運ぶとなると、BHは意外に遠い。一昨年の長雨で地形が変わり、川原が支流で寸断されてしまったが、その支流がやや深くなり、二箇所の徒渉地点を探さなければならなくなっていた。長物を抱えてはビョンビョンともいかない。ましてやセメント袋でこけようものなら…。

徒渉地点確保にスコップを持ち出そうとしたら、これがまた、鍵があかなかったそうだ。幸い今回の荷物にはボールが入っている。これで



佐藤 矢内 矢田部 清水 角谷 椿川 奥名

こじあけ、新たな鍵は今日帰る現役に、辰野さんへの連絡として頼むことにする。

小屋の中はいつものようにカメちゃんが散乱。これはともかく後回し。スコップをかかえて下りる。2箇所の徒渉はそもそも、支流が流れ込んでくるために生じている。その流れ込み口を塞いでみる事にした。運搬はバイト料を払う訳だし、椿川プロの元OB計3名は、流木を運んだり、石を転がしたりの土木工事に励んでみる。つまるところは、本流の川床が高くなっている限り、ちょっとした障壁くらいでは止められないのだった。心持ち水量は減ったが、このままえぐられていくとなると、将来的には面倒である。

荷物は中継地点を往復しつつで、土木工事地点までまず運びこまれた。ここでバナナ休憩。みんな汗だく。4時までとなると、小屋までどうにかセーフのあたり。人力頼みはそうはかどるものではない。ほんと、現役バイトを頼んで正解だった。

最後はBHへのきついきつい登り。そんな真似はできるはずもないから、せめて邪魔になりそうな枝をせっせと切る。そしてついに全部が運び上げられた。御苦労様。現役に協力してもらった資材と思うと、この後もきっと嬉しく仕事ができるだろう。冷やす時間もなかった缶ビールをつけてありがとう。そしてさようなら。おっと、その前に水洗トイレ見てってちょうだい。といっても見るだけじゃ良さはわからない。秋の小屋作業までお預けなんて……小屋の価値がどうしたらわかるものだろう。

BHに静けさが戻った。まずは掃除だ。奥名さんが水場を見に行き、私達はカメ虫除去。今年は冬が長かったせいか、ミイラではなく、ご存命のお目覚めになった所を、お立ち退きいただく。ドバツ、ドバツと、しゃっくりするよう

にホースから泥水が出てくる。これも小屋開きの音のうち。お、澄んできたと思ったら「傷テープないけ？指先切った。」「あ、そういえば、辰野さんの水場のマニュアルに、『軍手をはめて』と書いてあった」。後の祭り、お気の毒様です（これも次回は改善されるそうです）。

「この床、明日剥がすんやろ？」「んー。ほんでも今日は、寝んならんし…」真面目に拭き掃除をする。あいかわらず、蛇の排泄物に、諸々の残骸。これらが汚いかといえ、ちゃんと自然に分解されていく物達であって、累々の不燃物の不快さとは次元が違う。そして、ゆったりと流れる時間といい、小屋では誰もが哲学者になれる。夕食をとって、明日の早出の準備をしたら、もうすることがない。「いい所やけど、一人じゃおられんなあ」「田村さんは80日いたんよ」

そう、ここで田村先輩は「変わり者」から、名実とも「教祖」へと解脱された。「大学生10年」なら努力しなくてもできるし、偉かったのは親の方というしかない。が、小屋住まいの方は物好きだけではやり通せない。私も、80日は最初から真似はできないが、自転車での、ダムまで往復は1回やってみたいと思っている。還暦にそれをやれるだけの体力を保持しておきたい…は一つの目標である。ともあれ、ここで80日を過ごされたこと、週1の買い出しをマウンテンバイクでされていたことは、既に「田村伝説」となった。創部者なら必ずいるが、後年にさらに伝説を加えるような人はそういない。

奥名さんも、椿川さんも、明日は町会の用事で、高三郎の後はすぐ下山だ。「朝5時に出れば、1時には戻ってこれるよ」「それなら、十分や」。ゆったりした時間といいつつ、その前後がつか詰まってしまうのがOBなんである。



【浮上する？カモシカ。この山本来の住人】

5月13日（土）

ラーメンの朝食。昔は雪山幕営の定番だったが、今は、ネパールトレッキングのララを思い出す。インスタントラーメンごときで思い出せるのは幸せだが、小屋の生活ってのは、あそことたいして変わらない。遠いようで、近い。そんな発見がなんか楽しい。そんな手抜きでも何か慌たしい朝、隣の消音トイレが、快適。（だって、いつ抜けよう、どこへ隠れようって、朝はやっぱり落ち着かないもんです。）

ダムまでの道は4月28日から通行可ということだった。だから、高三郎にはまだ人はそう入り込んでいない。今回は新道―頂上―旧道と周回してみる。久々、登りの新道。やっぱり並みの急坂ではない。それでもイワウチワが励ましてくれるし、傾斜がゆるむとユキツバキの大群生地。「現役の時に、花を見た覚えある？」「ない。前のやつ靴しか見とらんかった」そうなのだ。あれだけ関わりながら、山としての高三郎の記憶がない。ペグが足りないとお説教をくったことや、沢水を食器4杯飲んだことや、みんなの汗が道路に筋になっていた事なら覚えているが、あの頃、景色も花も目に入っていない。シャクナゲなんて卒業してからの領域なのだ。

うっかり礒倉側に行きかかる。クラコシ尾根にまたヤブが茂りだしたのだ。枝伝いに枝渡りと、今の時期でこの状態だと、この後は通行可とはいいい辛い。これを厄介と思うのは人間様の都合であって、カタクリに、蕾から満開までのシャクナゲと、花の方は存分に咲いていてくれる。このところ、登山口へ行ったらギョッとする程の車、頂上にはわんさかの人…に興醒めすることが多くなった。誰にも自然を楽しむ権利はあるが、人を見に山へ来たのではない。だか

ら、ヤブの復活が「困った」というより、好ましく思えてしまった。いつまで来れるかわからないが、ずっと自然豊かなままの山であってほしい。

とはいえ、四肢を駆使してで、ストックも邪魔になるのみ。「9時に着くかなあ」と言ったら、あとの二人に「無理なんじゃなあい？」と言われ意気消沈。大休止してもらう。もうちょいで前方のシャクナゲ尾根にドッキングなのだが…。「ほら、あそこの影、カモシカみたいな形になってるよ」「ああ、あれか」…数秒後、「影がなくなった…」「えっ？」ほんと、消えている。そこから空中に浮くように、移動中の影があった。高曇りの空と雪の稜線がとけあって、妙な立体感になってしまう。

分岐がべったりの雪。ロープのかかる痩せ尾根あたりが夏道伝いになり、また雪庇伝いのルートをとって、最後、ずんぐりの雪丘が頂上だ。無雪期は笹藪の中で興醒めだが、360度の展望になるこの時期は惚れ惚れの頂上だ。白山の頂上部が雲に隠れているぐらい。ここからは白山北部の山々の北面を見ることになり、まだ雪がたっぷり。南面になる大門は随分雪解けが進んでいる。そんな景色を見渡しながらの、ビールのおいしさは格別。これ以上の贅沢を思いつかない。山スキーの跡がある。33期佐藤夫婦が、予定どおり連休に来たのだろうか。

証撮写真を撮って下山。雪がついていると、旧道への分岐地点がわかり辛い。新道から女性が一人上がってきた。一人でも来たい人がいるんだなあ。「すごいですねえ」と言ったら、「いいですねえ」と言われた。そりゃあ、こっちは両手に雄花だもん。というより、一人でも登りたいほどのこだわりの山なら、なおのこと、そんな山へ登りたい仲間のいる人が、かえって

羨ましいかもしれない…と、思った。でも私は高三郎にこだわったって、一人で来る根性はない。だからやはりスゴイと感心するしかない。

分岐下のロープ付近はさらに足場が崩れてきていた。そこからも枝が茂り気味。昨秋の作業がここまできていないのと、雪で道になだれかかっていた木々が起き上がっていないせいなのだ。枝をよけたり、つかまったり、ずっと「手足の運動」状態で、駆け下りる。

本日2組目のすれ違い者は、くろゆりクラブの下見の3名だった。今春から、くろゆりクラブは発足15年をむかえ、ナカオとの姉妹関係を打ち切った。それで、下見に出るなどの自主活動も始まっている。見送って振り返ると、分岐から上はすでにガスの中。同日に登っていても、展望条件はがらりと変わる。健脚のあの人達でこのペースなら、引率される連中に踏破は難しい。この分裂劇の主因は、ナカオが主導の場合、「ほとんどの人が登れる山」で選定していたのに対し、「いつまでも、登りたい山に登れない」の不満の鬱積だったらしい。団体登山になれば、水準をどこにおかねばならないか、連れていってもら立場のみの人には、同じような場数を踏んでいてもわからない。翌週予定だった高三郎はこの下見の結果、行き先変更になった。これまでのところ、華々しい登山計画のほとんどが、行き先変更の憂き目をみてしまったようだ。「登りたい」、「登れる」、「他人を連れて登れる」、この間に横たわるクレパスは、責任がかかってみなければ気付かない。事故がからまないうちに、個々の自覚につながってくればいいが…。

残雪豊富なせいで、前高も広々ブナ林だ。ここは左、左とルートをとればいい。この地点は迷い易いと苦情が多いらしいが、この「苦情」感覚がよくわからない。山へ入ればすべてが自己責任なのだから。

ともあれ、この秋には、倉谷から頂上まで、8本の標柱が立つことになる。これは金沢市からナカオが請け負う仕事だ。この春にも、高尾-吉次山間の8本を3回の作業山行で立ててきた。プロが交じる手際の良さ、ナカオの誇りにかけてで集まる人達に感心した。もちろん報酬は会へで、打ち上げ飲み会ができるかどうかの額だ。

その後もおなじみの急坂で、間隔をあけていたからそうは目撃しなかったものの、それぞれによくこけた模様。新人トレには無理やろうなあで、降り着く。登れた自分を誉めなくなる山。そしてまた会う日までと後にする山…。

なお、上馬さんは早朝に新道に上がり、砺倉やクラコシ尾根で猿の観察をしていた。私達が分岐から下りにかかる所が見えたということだった。

そんなふうに、猿や、カモシカに加えて、KUWVもこの山に頻繁に出没していた時代があった。13年前、白山の時以上に万感の思いで頂上のKUWVの木札を撫でたものだ。「帰ってきたよ！」今度は、そこへナカオの人達と、金沢市の標柱を立てる。流れた時間への、象徴ともいえる仕事。そう、時が流れたのだ。KUWVがどうであれ、高三郎は高三郎であり続けるのだから。ただちょっと、こだわりのご挨拶を胸に、仕事をしてきたい…私のM5。

2000年春 山小屋酒場

13期 辰野 隆義

前回の報告で予告したとおり、今回は、小屋の床の張り替えが大きな目標となった。

秋の山小屋酒場終了後、記憶が鮮明なうちに材料仕入の下見はだいたい済ませてあった。そこで、大仕事のわりには慌てる事はないと、一週間前になってから、買い出し品の最終チェックに出掛けた。

すると、予定していた床材が、予定の3分の1程度しかなく、入荷予定は金曜日との事。金曜日といえば、材料搬入の当日である。すでにダムの手配の手配も済んでいる。間に合うかどうか……。運を天に任せるしかない。

5月12日（金）

10時に椿川君（18期）とムサシの前で待ち合わせ、買い出しする。床材は、入荷したばかりの、まだ梱包も解いていない物を購入する。結構なボリュームがある。舟田さんを通して現役生のポッカバイトを頼んでおいて正解だった。

購入した資材は以下のとおり。

床材（2×4用6フィート材
1800×49×19厚 松材）130本
"（" 8フィート材
2400×49×19厚 "）23本
床用釘 2箱（約2000本）金槌3本
脚立（3m 2ツ折り）1台
セメント（20kg）2袋 …秋の作業用

天気予報では金曜頃から天気はよくなるはずだった。それが半日ずれてきており、午前中の今、まだ雨が降っている。

午後1時。ダムサイトで、今日入山する人達と待ち合わせ。木材は、4-5本ずつビニル紐でくくり、持ちやすくしておく。それでも40バツの荷物となる。

現役バイトは5人来てくれた。これなら、腰

が痛い、膝が痛いと言っている参加OBの負担もほとんどなくて済みそうだ。

この日ポートで倉谷へ入ったのは、奥名会長、舟田事務局長、椿川君（ポートの手配など、全てやってくれた）以上3名と、現役5名。その8名と荷物は、2便に分かれて倉谷へと搬入された。

私は、今日は引き上げ、明朝、他のメンバーと入る事になっている。現役組も今日帰るそうだ。

5月13日（土）

いつもの工学部に、いつものメンバーが集まった。もう少しいろんなメンバーが来てくれると良いのだが、それは当初のモットー「無理せず」「楽しく」「迷惑かけず」に反することになるかもしれない。いろんな人が、都合のついた時に参加してくれれば、それで良いでしょう。

いつものということは、田村御大（0期）、吉田、吉本、辰野（以上13期）。久しぶりの坂尻君（15期）が時間が過ぎても現われず、見捨てて出発。（上馬君の方へ、親戚の葬儀で不参加の連絡があったらしい）

さて、ダムへ着くと、いつもと雰囲気が違う。車がいつもになく多く停まっておたくさんの人がたむろしている。どうやら、企業局主催のゴミ拾い大会（倉谷までの道の、どこにゴミが落ちているのでしょうか？）らしい。開会の挨拶をしている真ん中を通り抜けて、足取りも軽やかに出発。歩くにはちょうど良い天候だ。

山小屋は、昨秋と変わらぬ姿で出迎えてくれた。水場も便所もそのままだ。

昨日入山の連中は、今日は早朝から高三郎へ行っている。でも、しっかりと、ビールは冷やしてあった。ご好意に甘えて、まずはビールで喉を潤す。最高！！これがあるから酒場は止め

られない。

小休止の後、さっそく小屋奥から床板（合板のフローリング）をはがす。ぼろぼろになっている。雨漏りだろう。ふと見ると、右奥の根太に白アリが発生している。これはマズイ。

急遽相談。今回、奥の方は床板を固定せず、秋に白アリ退治処理を行い、根太を取り替え。その後、釘止めするとの段取りをつける。

それにしても、奥から床板を並べてこなければ、入り口側が張れない。そこで、固定はしないが、きっちり寸法取りをし並べてみる。入り口側では、寸法合わせや、調整のため、鋸を使っての細かい細工が必要になる。細かいといながらも、案外いい加減でもどうにかなるものである。

そうやって半分くらい板を並べたところで、高三郎へ行っていた3名（奥名、舟田、椿川）が帰ってくる。疲れているようだが、充実感が漂っている。私もそのうち……少しでも……ちょっと……無理かな。

少し手伝ってくれた後、本山下山組の奥名、椿川の二人は名残惜しそうに下山。新しい床で寝るのは次回までお預けです。

どうにか寸法合わせをし、入り口側の床だけは浮き上がると危ないので、釘で固定する。夕食までには形を整える事ができた。

素晴らしい。実に素晴らしい。白木の、合板ではない、1枚板組の床。寝っ転がると、木の香りがぷんとする。

そこへ、本日入山組ながら、早朝出発をしていた上馬君（15期）が上がってくる。一人で猿の調査をやっていたらしい。山小屋へ入るなり、感嘆の声をあげてくれた。

夕食は例によって、山菜のオンパレード。日頃目にする山菜から、これはどうみても雑草でしようという品の天麩羅まで、じつに素晴らしい夕餉でありました。



【本当は実技いらずのお立場らしいのに、鮮やか手際の辰野親父。倉谷の廃屋はあれよの間に朽ちた。手入れがあってこそその山小屋】



【白木の床の豪華さは
我が家以上かも】

辰 吉 吉 田 上
野 本 田 村 馬

また、田村さんの倉谷での顔の広さと図々しさの御蔭で、大きな岩魚2尾、日本酒1升も入手。骨酒にもありつけました。吉本曰く、“現代版わらしべ長者”だそうです。

そんな酒宴のつまみは、上馬君の白山山系から倉谷近辺に至るまでの、野性の猿のお話。いくら好きとはいえ、自分の足と目で確認しての話だからすごい。

メニューの豊かさから、話題のレベルの高さから、下界ではとうてい味わえない酒宴でありました。

その夜は白木の香りと、酒の酔いにまぎれ、心地よい睡眠となりました。

ところが、夜明け前に大雨が降り、雨漏りはじめ、バケツをあてたり、移動したりと、気付いた方は夜中の作業があったようです。私は雷鳴を記憶しているぐらいで、ぐっすり。

5月14日(日)

翌朝雨はあがり、爽快な朝。雷鳴を聞いた者、雨漏りに気付いた者、その後の鼾を聞いた者と、同じ小屋に泊まったはずが、各自証言が食い違う。大笑いの朝食のあと、せっかくの新し

い床が雨漏りで傷んでは大変と、屋根修理からとりかかる。

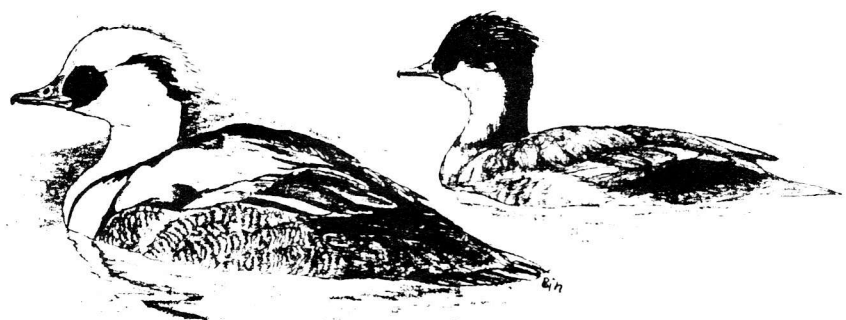
さっそく、搬入したばかりの脚立で屋根に上る。原因と思われる箇所、大きなトタンを打ち付け雨漏り対策完了。その後、出発前にも通り雨に見舞われたが、漏ってはこなかった。昨夜は降り始めてからまもなくポタリときたそうなので、とりあえずはOKではないでしょうか。

残りの床板も、可能な物は釘で固定し、フリーの板はNOをつけて再度剥がし、風通しをよくした上で、今回の作業を終了とした。

次回秋は、白アリ対策の後、床板の完成。それに、いよいよ囲炉裏の製作へと入っていきます。興味のある方の参加をお待ちしています。

また、山小屋でぼんやりとしたい、岩魚釣りをしたい、高三郎へ登ってみたい、その他、いろんな人の参加もお待ちしています。秋には、栗にキノコがおいしいですよ。

以上、報告及び、お誘いでした。



ミコアイサ ♂♀

山小屋酒場沿革史

ベルクハイムと小屋作業の歴史については、創立35周年記念誌 上巻p180- 229をご覧ください。

初代BH 1964年(昭和39年)11月完工 6期石橋 合津他
2代目BH 1974年(昭和49年)9月竣工 16期川端 山内他

1993年(平成5年)9月 大修復着工 屋根張り替え 36期石川 立川CL他
94年(6年)9月 " 床張り替え 37期福田 戸田CL他
95年(7年)9月 雨漏り修復 愁心碑修復 38期佐川 正善CL他
9月23日 修復記念・月見の宴 OB35名参加

10月25日 月見の宴反省会・兼3回生(38期)とOB会役員懇親会

この席で、金沢市の登山道修復補助金を受ける団体として申請することを合議。
かつ、小屋作業をOBでやってみないかの話がもちあがる。

96年(平成8年)3月 やまざと96号外にて、山小屋リフレッシュ会立ち上げと、OB
による登山道整備を提言。実行時には辰野オヤジにより「山小屋酒場」が正式名と
なる。

第1回 96年(H8)5月12、13日 参加16名

登山道偵察・旧道800m付近まで整備

器材搬入、小屋までの階段整備、小屋回り整備、残材焼却処理、水場までの
ルート刈り開け、ベンチ造り

*ワイン酒多飲氏(0期 田村)小屋番就任 5月12日-8月1日

第2回 96年(H8)9月21-23日 参加16名 現役22、23日 39期川本CL他

登山道整備(800m付近-分岐手前鞍部)

ホース搬入、水場設置、ホース埋設

*暁風翁氏(0期 田村)小屋番復帰 9月25日-10月6日

第3回 97年(H9)6月7、8日 参加10名 現役4名搬入バイト

登山道整備(800m付近 ロープ設置 テン場刈り開け)

小屋土台の補修、流し場制作、かまど補修

第4回 97年(H9)9月20、21日 参加6名 現役19-21日 40期高岩CL他

登山道整備(分岐手前鞍部-分岐と頂上の間あたりまで)

トイレ用資材の切り出し (OBスキー合宿の話がもちあがる)

第5回 98年(H10)5月23、24日 参加12名

登山道整備(分岐-頂上)

トイレ小屋組、基礎固定、トイレ給水・排水管敷設、戸枠作成

*創立40周年記念総会・懇親会 9月12、13日 医王の里 参加OB58名、家族11名

*現役小屋作業 9月16-18日 41期河村CL他(頂上部刈り開け、頂上看板設置)

第6回 98年(H10)10月4、5日 参加7名

便器本体取付・固定 給排水テスト、防腐処理

*99年(H11)春 県道寺津-倉谷線不通により中止

*現役小屋作業 9月18-20日 42期石川CL他(前高三郎周辺)

第7回 99年(H11)9月25、26日 参加6名

トイレ完成 屋根修復

第8回 00年(H12)5月12-14日 参加8名 現役5名搬入バイト

高三郎偵察 資材搬入、床張り替え、屋根修復

第9回 00年(H12)秋予定...HP閲覧もしくは事務局へお問い合わせ下さい。

白アリ対策 囲炉裏制作

「野猿天国」複数に分裂？

金沢・犀川上流域

新たにナラダケ群 アゲハラ群 命名

金沢市の犀川上流域に、ニホンザルの群れが複数存在していることが石川県自然保護センターなどの十三日までの生息調査で分かった。周辺ではこれまで高尾山周辺の「タカサプロウ群」だけが確認されていたが、同山から離れた地

点で五つの集団が新たに見つかり、このうち二つが「ナラダケ群」「アゲハラ群」と名付けられた。暖冬で猿の生存率が高まる中、「本家」の白山ろくに比べ、積雪量が少なく、冬場も比較的安全性が得やすい同川流域の環境が群れの拡大、分裂を促していると考えられる。関係者は白山ろくと同様、市山間部の集落にも猿が出没する可能性があるとして広域的な分布調査の必要性を指摘している。

四十六年にさかのぼって周辺の目撃情報やふん、食痕などを記録。この結果、奈良岳周辺では猿の姿やウナギなどを食べた跡が再三目撃されていることが分かった。上馬康生研究主任は「タカサプロウ群とは別の群れの可能性が大きい」としてナラダケ群と命名した。アゲハラ群は平成十年二月に華原山近くで見つかった四十二頭で、発見者の白山自然保護研究会の滝澤均氏が動物園企画教育係

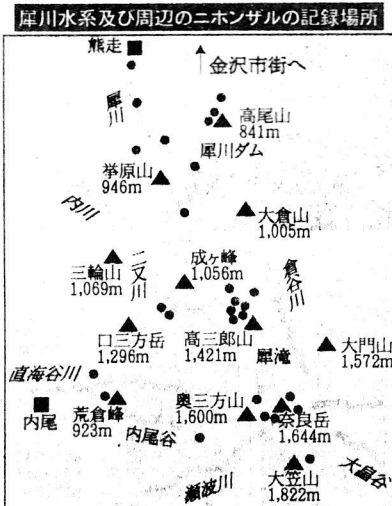
猿に関する生息調査や研究 成七年十二月、畑が猿に荒らされたことから、犀川自然保護研究会が実施している。調査は、金沢市熊走地区で平らされる被害が初めて出た「センター」や白山自然保護研究会「自然保護センター」は昭和

暖冬で繁殖 猿害再発の恐れ警戒

※赤い印が猿の姿やふん、食痕が記録された地点。記録は昭和46年から



▲木の上で確認された猿の集団。「アゲハラ群」と名付けられた＝平成10年2月、金沢市の華原山周辺(滝澤均さん撮影)



長が名付けた。このほか、大笠山で九年六月に雪渓を横切る三頭が見つかり、二十一年十二月には口三方岳で十頭から目撃されていたことも分かった。高尾山、医王山でも冬期に二五頭の足跡が確認されている。上馬さんによると、これらは新たな群れの可能性がある一方で、タカサプロウ群が冬場を中心に移動していることも否定できないという。

犀川上流域での猿の総数や群れの行動様式は不明だが、自然保護センターは現地で数が増えているのは確実と指摘する。原因としては、本来は厳しい自然環境の冬に淘汰される子猿が暖冬で生き抜き、繁殖に参加することが挙げられる。白山ろくの猿の群れは平成七年は二十三群だったが、十一年には二十八群に拡大、山里に下りて農作物を荒らす群れも目立つ。上馬さんらは「金沢でも今後、集落に近い山間部に猿の進出が進むことは十分考えられる」と話している。